

【主題】 児童の思いをつなぎ、自走する生活科を目指して

【副題】 「自分ごと」と「相手意識」を持った主体的・協働的な授業づくりを通して

【学校・団体名】 宮城県仙台市立東四郎丸小学校

【役職名・氏名】 教諭 木村 雄太

1 はじめに

新学習指導要領が小学校で全面実施となって5年が経ち、本校でも趣旨を再確認しながら少しでも質の高い授業となるよう努めている。根幹となった中央教育審議会では、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）の中で、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげるために、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が大切である」と述べている。また、直面する課題の一部として、児童の多様化と学習意欲の低下が挙げられている。

そうした中、本校の児童の実態を見てみると、素直で人と関わりたい気持ちを持ち、学年を跨って関わる姿も多く見られる。一方で食材・公共物・マナー・文化など知らない事や経験したことのない物事も多く、やりたいことはあるが自分に自信がない児童が多い。家庭環境も配慮を要し、純粋に学習と向き合う素地が整っていない家庭も見られる。そうした要因から「やってみたいが失敗するくらいならやらない」「誰かがやってくれる」「どうせ私なんて」という気持ちが生まれ、学習意欲低下につながっている。まさに、同答申に挙げられているものと同様の課題を目の当たりにしている。

そこで、こうした実態の本校児童に対して、体験活動を充実させるとともに、児童の「やってみたい」という思いや「もっとこうしたい」という願いをつないで授業を展開することで、児童が自ら問い続け学び続ける「自走する授業」につながると考えた。思いや願いを原動力とした学習活動を通して、児童が自信を持ち、主体的かつ協働的に学ぶ児童を育てたいと考え、主題を設定した。

児童の思いや願いをつなぐためには、教師がその思いや願いの持つ価値に気付き、アンテナを広くして見取る必要がある。本稿では、探究活動における原動力となる児童の思いや願いをどのように見取り、つなげ、児童の自走する学びとなるよう寄り添っていったのか、その方法と成果について報告する。

2 研究方法

本校の児童の実態を基に、自走する授業を目指す上で徹底していきたいと考えた3つの重点を以下のように考えた。

- (1) 授業や日常のつぶやき、学習カードなどから、授業のきっかけとなる児童の思いや願いを見取る。
- (2) 見取った思いや願いを価値付け、その実現をねらいとすることで、児童の学習問題が「自分ごと」となった、主体的な授業の導入や展開を行う。
- (3) 単元の導入や学習活動の中で、「相手意識」という視点を持つことで、対象を明確にした対話的・協働的な学びにつなげる。

以上の3つの重点を意識して生活科の授業づくりを行うことで、「自走する生活科の授業」を目指す。本実践の有効性については、授業での児童の姿や学習カード、仙台市生活・学習状況調査の結果の分析などから考察を行う。

3 対象学年と単元

【学年】

令和5年度 2学年1組（25名）2組（24名）

【単元】

- ① 「春のまちたんけん」（4・5月）
- ② 「夏やさいをそだてたい」（5～8月）
- ③ 「冬やさいもそだてたい」（9～12月）
（「まちたんけん パート1」（6・7月））
- ④ 「まちたんけん パート2」（9・10月）
- ⑤ 「おもちゃづくり」（11月）

4 研究実践と考察

どの授業においても、導入の最初の一言が大事であると考え、具体物を見せる、キーパーソンと出会う、体験活動を行うなど試行錯誤を行ってきた。そうした中、児童が最も興味関心を高め、その後の主体的な学習活動につながったのは児童の思いを取り上げた導入であった。休み時間や放課後等に思ったちょっとした気付きや、「やってみたい」とつぶやいたことを学

級で紹介することで、自然と同じ思いが広がっていく様子が見られた。教師主導で興味・関心を高めようとすると、どうしても無理やりやらされているという意識が児童の中で生まれる。しかし同じ学級の児童の思いであれば、「自分もやってみたい」「言えなかったけど私もそう思っていたんだ」という児童が多く、導入で取り上げることで「自分たちのやりたいことが授業になった」という達成感から、その後の展開でも徐々に思いを発信し学習をつなげることができた。各単元での実践の具体について、3つの重点に示した「きっかけとなる思い」の見取り、「自分ごと」となる工夫、「相手意識」とともに以下に示す。

①「春のまちたんけん」

【きっかけとなる思い】

- ・学校に来る時の土手の桜並木がきれいだった
- ・公園にきれいな花が咲いていた
- ・みんなに見せたいな

登校後の児童との会話から、通学路での春を感じる景色に興味を持っていることを見取り、導入で紹介した。するとやはり周りの児童からも「僕も」「私も」と次々に紹介が始まった。

【自分ごととなる工夫】

- ・Google マップのストリートビューにて、自分の紹介したい春を感じる場所を案内し、Web カードを作成してロイロノートで共有

紹介したいことが多く、また言葉だけでは場所の説明が難しいものもあったため、一人一台端末を活用して共有した。それぞれがおすすめの場所をロイロノートに提出して見合うという活動を一齐に行うことができるため、個々の思いに寄り添いながらも短時間で共有をすることができた。(資料1)

提出順▼ 回答を隠す 回答共有中 一括送却



(資料1) ロイロノートの共有画面

【相手意識】

- ・クラスみんなに家の近くや通学路で見つけた春を紹介したい

対話や協働的な学びを引き出すための相手意識として、本単元ではクラスメートを設定した。2年生の児童にとって、自分の通学路以外はあまり知らない場所であることも多く、同級生の紹介する地区に目を輝かせながら聞いていた。お互いに紹介したことで新たに行ってみたい場所ができ、その思いを基に学級ごと春のまちたんけんに出かける学習へとつながった。

②「夏やさいをそだてたい」

【きっかけとなる思い】

- ・春のまちたんけん畑で畑をたくさん見つけたよ
- ・どんな野菜を育てているのかな
- ・私たちも育ててみたいな

本校周辺には田畑が多く、子供たちは春のまちたんけんに出かけた際にも農家の方や野菜の自動販売機などと出会い、野菜の栽培にも多く目を向けていた。

【自分ごととなる工夫】

- ・一人ひとり自分の育てたい野菜を決める
- ・自分の苗を自分で購入する体験を行う

育ててみたい野菜を聞くと、家族にも食べてもらいたいという思いから一人ひとり違う野菜が挙げられた。そうした思いに寄り添い、また自分ごとの栽培活動となるよう、自分で苗を購入する体験を通して愛着を持って育てさせたいと考えた。そこで、学校周辺には販売所が無いいため、少人数担当教諭がホームセンターに出向き、お店の苗をオンライン中継しながら野菜選びを行った。店員にできる実の数や育て方のポイントなどを教わり、育てたい野菜を決めることができた。教師に配布された苗ではなく、自分で選んだ苗を、自分でお金を払って購入するため、出張販売を依頼した。葉の色や手触り、匂いなど諸感覚を大いに活用しながら購入する姿が見られた。(資料2, 3)



(資料2)
店員から自分で苗を購入する様子



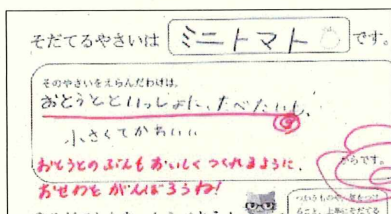
(資料3)
匂いを確かめながら苗を選ぶ様子

【相手意識】

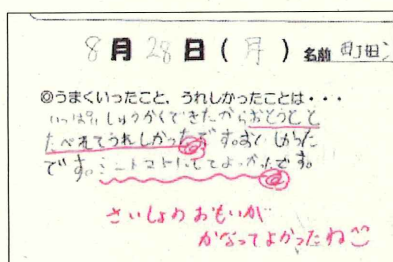
- ・自分や家族が好きな野菜を育てて食べてもらいたい
- ・お店の人や地域の人に育て方を教わりたい

導入の場面でどうして野菜を育ててみたいのか問いかけたところ、ほとんどの児童から野菜を育てて家族と食べたいという発言があった。(資料4)

こうした相手意識を持った動機付けは、自分ごととして主体的に栽培活動に取り組む姿に表れ、収穫・喫食までつながるような活動の柱となる思いにもなった。(資料5)



(資料4)
ミニトマトを弟と食べたい思いを表現した



(資料5)
「おとうととたべられてうれしかった」「ミニトマトにしてよかった」と活動を振り返る

③「冬やさいもそだてたい」

【きっかけとなる思い】

- ・夏野菜は一人ひとり違う野菜を育てたけど、今度はみんなで同じ野菜を育ててみたい
- ・育てたらみんなと一緒に食べたい

夏野菜の栽培では自分を中心に思いを膨らませていた子どもたち。当初の予定にはなかったが、一つの達成感を得たことで「今度はみんなで同じ野菜を育ててみんなで食べたい」という思いがとても大きかったため、その思いの実現のため冬野菜の栽培ができるようカリキュラムを再編成した。

【自分ごととなる工夫】

- ・1人ずつ自分の米袋に大根の種を蒔いて育てる
- ・栄養教諭の協力の下、間引きした葉を給食に使用し全校に紹介

みんなで育てつつも、自分の野菜を大事に育ててほしいという思いから、一人一つ米袋を用意し、大根の種蒔きを行った。米袋での栽培は、自分の物が分かりやすいという点に加え、土を入れると自立し深さのあるプランターの代わりとなるため児童の栽培にとっても適していた。

また、野菜の栽培で対応を悩むことの一つに間引きがある。そこで事前に栄養教諭と打合せを行い、育てた大根葉がもったいないという思いを解消できるよう

準備をした。

その上で児童と間引きを行うと、やはり大きくなってきた葉を捨てたくないという思いが生まれた。話合いから「全校のみんなに食べてもらいたい」と思いが広がり、栄養教諭にお願いに行くという活動へつながった。

【相手意識】

- ・間引きした葉を全校のみんなにも食べてもらいたい
- ・収穫した大根をクラスのみならずと食べたい

1人ずつ自分の大根を育てていたが、本単元では「みんなで食べたい」という相手意識もあったため、互いに育ち具合を比較してアドバイスし合ったり、友達の野菜にも水やりをしたりと、友達と関わり合いながら育てる様子が見られた。

④「まちたんけん パート2」

【きっかけとなる思い】

- ・まちたんけんパート1で行ったお店にこけしがおいてあったよ
- ・私が行ったお店にもあった、どうのことだろう
- ・まちのこけしについて調べてみたい
- ・私もこけしを作りたい

夏休み前に「まちたんけんパート1」としてグループごとに「ばらばらたんけん」を行った。本単元はその振り返りを基に、児童の気付きが互いにつながったことで、地域のこけし工人への思いが高まったことから活動が始まった。

【自分ごととなる工夫】

- ・児童の思いを基に地域の工人とつながりのある白石市の工人を招き、一人一つ自分のこけしを作る体験を行う

地域のこけし工人について調べた後、自分もこけしを作りたいという思いから、こけし作りができないかという活動に発展した。ある児童が、地域のこけし工人が白石市で修業をしたと話していたことを思い出し、ルーツとなるこけし作りの伝統を調べることとなった。そうした中、弥治郎系のこけし工人とのつながりが生まれ、学校でこけしの作り方を教えていただけることとなった。(資料6)

さらに、打合せを行った弥治郎こけし村の新山吉紀工人が江戸独楽作りを行っており、独楽回しの名人でもあったため、次のおもちゃ作りの単元にもつながると考え、子供たちに体験を依頼した。(資料7)



(資料6)

こけし絵付けの様子



(資料7)

独楽回し体験の様子

【相手意識】

- ・まちたんけんてでわかったことを日頃から異年齢交流をしている5年生に伝えたい

まちたんけんてで学んだ事をまとめると、自分たちが頑張ったことを日頃から褒めてくれる5年生にも、ぜひ聞いてもらいたいという思いが生まれ、交流活動へとつながった。

⑤「おもちゃづくり」

【きっかけとなる思い】

- ・こけし作りを教えてくれた先生に見せてもらった独楽で遊びたい
- ・他にもいろいろなおもちゃを作って遊びたい

こけし作りと独楽回しの体験は子供たちにとって大変印象的で、すぐさまおもちゃづくりについての思いが膨らんだ。そのため初めは回すおもちゃを選ぶ児童が多かったが、次第に飛ばす、浮かぶ、転がるなどいろいろな動きをするおもちゃ作りへと発展していった。

【自分ごととなる工夫】

- ・自分が作ってみたいおもちゃを決め、思い思いに試行錯誤できる場を設ける

自分のオリジナルおもちゃを試行錯誤して作る活動を通して、自分のおもちゃへの愛着とこだわりが見られるようになってきた。「もっと高く飛ばすようにしたい」「もっと頑丈にして1年生とも遊びたい」など、新たな思いや願いが生まれた。

【相手意識】

- ・5年生に難しい箇所を手伝ってもらったり、遊び方を一緒に考えてもらったりしたい
- ・作ったおもちゃを1年生にも遊ばせてあげたい

自分やクラスの友達とだけでは解決できない悩みもあったため、5年生にも協力をお願いした。方法として、2年生と5年生がロイロノートの同じ授業に参加する。そして作ったおもちゃが動く様子を2年生が動画で撮影し、困っていることや手伝ってほしいことを

アップロードする。それを見た5年生が、休み時間などに2年生の教室に来て一緒に作り直したり遊び方を考えたりするといった常時活動を行った。

また、撮りためた動画を編集することで、後におもちゃまつりを企画して1年生を招待する際のCMに活用した。

5 実践から見られる成果と課題

＜成果＞

- ・4月に行った春のまちたんけんでは、恐る恐る発言していた児童も、単元が進むにつれ自分のやりたい思いを表出させて活動することができた。
- ・児童の思いを教師が寛容的に受け止めることで、個別最適な学びにつながる学習の個性化に多くの場面で取り組むことができた。
- ・相手意識を持たせることで、個々の活動においても共通の学習問題を見出すことができ、協働的な学びにつながった。
- ・仙台市学力・学習状況調査の学習意欲に関わる6項目について、対象児童の2年次（令和5年4月）と3年次（令和6年4月）を比較すると、肯定的回答が2年次では【86.8ポイント】だったものが、3年次では【89.6ポイント】と3ポイント近く上昇した。

＜課題＞

- ・学習の個性化と指導の個別化を両立させる場合に、児童の把握が手薄になる傾向があり改善が必要。

6 まとめ

本校の児童にとっては体験活動の充実が興味・関心にも相手意識の高まりにもつながる重要な視点であった。今回の研究を通して、普段自信なさげに俯く児童にも、「自分がやってみよう」という強い思いと「誰かのために」という相手意識があることで、一歩踏み出す力となることが、活動の姿や表情から分かった。また、児童の思いを基に展開される授業を繰り返すことで、「あれもできる」「こうしたらどうだろう」と主体的に学び続ける姿につながった。子供たちは、教師の指示や発問を待つだけではなく、自分で、また自分たちで授業を展開する力を持っていたため、今後は教師のファシリテーターとしての役割が重要になってくると考える。多様化する児童の思いを一人ひとり見取りながら、個々の学習の充実を図れるよう指導に生かしていきたい。